

医大の一教員として
三重野牧子 (自治医科大学)

大学の疫学・生物統計学教室で計量生物学という学問に出会い、現在まで来られたことを考えると、まずはこれまでお世話になった多くの先生方、学会の皆様方に感謝を申し上げます。

計量生物学の未来に向けて、というタイトルですが、すこし立ち止まって日々の研究・教育業務から眺めてみようと思います。医大の情報センターの中の（どこにも書いていなかったのですが口頭で任命された）生物統計ポジションとして就職した頃は、「そういう専門を選ぶのは珍しいですね」と言われたこともあったのですが、最近、「これだけブレイクする分野をよく学生時代に選びましたね」と言われたりもして、いずれにしる複雑な心境になりました。いや、ちょっとした流行りものなどではなくて、などと思うのですが、地に足をつけて丁寧にやっとうと逆に実感した出来事でした。大学の方では最近になってやっと、医学統計学と名付けられた分野を設けることができました。

さて、卒業論文のテーマであった腎移植レジストリは、その後ライフワークのようになってきました。日本における臓器移植症例の登録および追跡調査に関わり、紙の調査票で調査されていた頃から USB メモリを用いた調査、そして現在の web 登録に至るまで、データベースの質を担保するには？よりデータ回収率を上げるにはどうしたらよいのか？など多くの課題を抱えながらデータベース構築や集計解析を行ってきました。封筒で送られてくる紙の調査票のときよりも、都度入力が可能で便利なはずの web 登録になってから、データ回収率が落ちたという現実もあります。国際化や他疾患レジストリとの協働等もしばしば議論されながら、まだ模索段階です。過渡期だからこそ、方法から管理、アウトプットまで、計量生物学で取り込まれている様々な考え方や方法論がますます求められているように感じます。統計家も複数いる欧米のチームが輝いてみえることもありますが、地道に継続発展できればと考えています。

大学の講義としては、主に医学科 1 年生の医療統計学入門の講義および実習を担当しています。医学生の過密なカリキュラムの都合上、現在は入学したての学生を対象にしています。上の学年の疫学等関連講義と内容を少し調整しながら進める形をとっています。どれだけ興味を持ってもらえるかが試行錯誤ですが、医学を学ぶモチベーションは高いことから、例えば、血圧とは何か、では、「データ」を測定するとは？など、臨床系の早期教育とコラボした授業も試みているところです。自治医科大学の学生は卒業後、基本的には各人の地元へ帰って医師として勤務します。ハウツーではない、統計学の基本的な考え方も地域に持ち帰っていただけるように、少しでも良い教育ができるよう精進したいと思います。

大学では自身の研究, 教育以外にも統計家として臨床研究支援や倫理委員会, 教育評価等, 何刀流もの役割が求められることがあり, 勉強も経験も追いついていないと感ずることが多々あります. 計量生物学会を中心とした専門家同士のネットワークを心強く思うと同時に, すこしでも貢献できるよう一歩一歩進めていきたいです.